

「がん総合相談に携わる者に対する研修事業」報告書

短期サポートワーキンググループ 報告

短期サポートグループワーキンググループ長 平井 啓

大阪大学大学院人間科学研究科 准教授

A. 目的

がん患者を対象とした「サポートグループ」は、がん患者の情緒面や対処能力向上のための心理社会的支援の方法として世界の多くの医療施設において提供されている。日本においては、がん対策基本法の施行以来、がん患者のQOL向上のために相談支援体制の確立と均てん化、さらにピアサポーター養成が取り込まれる様になってきた。しかし、現在のところ、がん診療に携わる医療機関において、これらの心理社会的支援の方法が十分に行われているとは言い難い。がん診療を行う病院においては、がん患者へ心理社会的サポートを提供するプログラムとして、医療従事者が運営する構造化された、あるいはピアサポーターが中心となり運営される「がんサポートグループ」を開催するなどにより、がん患者やその家族に対する支援の選択肢の幅を広げることが求められる。

このような心理社会的支援の拡充のためには、これを行うリソースの問題など各施設それぞれの事情を考慮した体系的資料やプログラムが求められる。特にがん患者へのサポートグループについては、これまでがん診療を行う病院の担当者の目線で、自施設の事情にあった「サポートグループ」を企画・開催するため、またすでに開催されているがんサロンやピアサポーターによるサポートグループの運営上の課題解決や質向上を行うための体系的で簡便な資料がなかった。

そこで昨年度、短期サポートワーキング委員会は、さまざまな「サポートグループ」の運営に携わったメンバーにより、ピアサポートを含む、さまざまな形や目的の「サポートグループ」に関して構造と機能の整理を行い、おもにがん診療を行う病院で勤務するがん患者を対象としたサポートグループの企画・運営に携わる医療従事者を対象とした、「がん

サポートグループ運営の手引き」を作成した。今年度はこのサポートグループ運営手引きを元に、サポートグループを含むサポートプログラムの全体像を示し、その企画ができるように改訂作業をおこない、「がんサポートプログラム企画の手引き」を作成した。

B. 経過

まず、ワーキングにおいて、がんサポートプログラムの目的について検討を行った。

まずがんサポートプログラムの必要性として、がん診療を行う病院は、がんの診療部門のみでなく患者と家族をサポートする部門と連携して、個別相談などの個別サポートと同病者との相互作用を活かしたサポートグループなど、総合的な心理社会的支援が受けられる体制づくりが必要であることを指摘し、病院以外にも住み慣れた地域においても、心理社会的支援を受けられる場との連携の必要性を統合的に示した。

次に、がんサポートプログラムの目的として、以下のものを含むべきとした。

- ① がん患者やその家族が安心して自分の悩みや体験など、指示や否定される事なく丁寧に話を聴いてもらえる場がある事で「今まで誰かに話す事はできなかったけど、ここは安心して話をする事ができた」「がんになった私でも受け入れてくれる場所があるのだ」と、安心感や所属感を感じられるようになる。
- ② 社会的孤立からも抜けだせるだけではなく、そこが自分の居場所の一つにもなりえる。
- ③ 悩んでいる人に自分の体験を話す事で、その体験が他の人の役に立つ感覚が持てることで「がんになった自分でも価値があるのだ」と、自分の存在価値を認めることができ自己肯定感が高まる。

- ④ 定期的にがんサポートプログラムが開催されていれば、次に参加する目標が治療のモチベーションに繋がる。
- ⑤ 治療中の方には痛みや吐き気などの対処スキル、他にも病院や家での過ごし方や学校や職場への伝え方、社会資源の受け方など体験した人ならではの具体的な情報を得る。

次に、がんサポートプログラムの形態としては、①講演会・レクチャー・がん教室など、②個別サポート、③サポートグループの4つの形態があり、医療従事者・院内スタッフが運営の主体となり、そこにピアサポーターが参加することが望ましいとした。

次に、理想のサポートプログラムとしては、がんの治療経過の中でそれぞれの時期で生じる心理社会的な悩み、ニーズに合うように、がん患者や家族が選択できる複数のプログラムがあることが望ましいとされた。一方で、最低限のがんサポートプログラムとしては、がん相談支援センターでの個別の相談支援体制に加えてピアサポーターと協働して運営するサポートグループや患者サロンを定期開催することであるとされた。

この中でサポートグループの開催・運営については昨年度まとめた、「がんサポートグループ運営の手引き」の内容を踏襲することとした。

C. 考察

短期サポートワーキング委員会は、がん診療に携わる医療機関において、がんサポートプログラムやサポートグループができるだけ負担のない形で拡充されることを目指すために、あえてひとつのプログラムを開催すると

いうのではなく、「がんサポートプログラムの企画の手引き」という形で、サポートグループ本来の目的を整理し、それを実現するための多様な方法をそれぞれの施設で工夫できるようにするために、サポートグループの運営に経験のある委員の議論をまとめ、具体的な例示を試みた。

今後の課題としては、ピアサポーター養成プログラムのコンテンツとの対応を強化することである。がん診療拠点病院においてピアサポーターがファシリテーターとして、がんサロンや個別支援を行えることは理想的であるが、ピアサポーターが安心してそのような活動に携わることができるようになるためには、本手引で示した、サポートプログラムの全体像を踏まえ、開催する病院における位置づけとその目的を明確化し、医療従事者や院内スタッフが運営の責任者となった上で、ピアサポーターにしか提供できない部分について担ってもらう必要があると考えられる。また、ピアサポーターの育成や確保が難しい場合は、医療従事者や院内スタッフがファシリテーターとなったサポートグループの開催を検討すべきである。

本手引きで示したような多様な方法ががん患者の支援において可能であり、できるだけ多くの選択肢をがん患者に対して示すことが、がん診療拠点病院には求められるのではないかと考えられる。

今後は、さらなる内容の検討を行い、ピアサポーター養成プログラムのとのコンテンツの調整ならびに、実際のサポートプログラム運営のコンサルテーション活動の実施を検討したい。